

# The Aim of Lifelong Integrated Education part II, III (生涯教育の目ざすもの)

(財)野村生涯教育センター理事長・野村佳子氏講演集より

足利市教育委員会・社会教育課 清水 邦 康

原文は、(財)野村生涯教育センター理事長・野村佳子氏の講演英訳集である。

生涯教育の推進は、行政・民間のそれぞれの組織によってすすめられているが、野村生涯教育センターは、民間団体としてすばらしい実践活動を行っている。このセンターは1962年設立以後、全国的な活動を行い、その大部分の会員は、家庭の主婦であることに特色がみられる。活動の原点を、「教育の本質は、人間性の開発」におき、東洋の人間観、自然観に基づいた基本理念をもっている。

基本理念の学習、その実践のための各種研修、講演会などを活発に開催するとともに、会員の子弟をも含めた幅広い、文化教養活動を展開し、毎年、全国の大会には、国内各地より多くの参加者を集め実践事例の発表、討議などが行われている。

また、このセンターでは、海外へ向けた出版活動、啓発なども積極的にすすめている。原文は、海外向、野村理事長の講演集であり、その中で、生涯教育への考え方が明らかにされており興味深いものがある。「The Aim of Lifelong Integrated Education 生涯教育の目ざすもの」は、3集により構成されているが、本訳は、第2集および第3集のうち的一部分を和訳したものである。また、和訳したうち一部分ここに記さなかった箇所もあることをご了承いただきたい。

注1.

## 【偏向教育から全人教育へ】 第2集より

今日の教育をみてみると、偏向教育、すなわち知識教育に偏っており、人生のうちの一時期だけの教育であるということがわかる。私(野村理事長)の講演「日本における教育の原理」において、私は、教育の目的、そして人間の調和のとれた精神、心情、意志の陶冶について述べた。さらに、そこでは人格への知的・道徳的教化による人間の発達についてもふれた。このことは、大変重要なことである。しかし、現在の教育で重視されているのは、知識教育になっている。この事実は、人間の発達を考えたとき、きわめて重要な歪曲である。もし、一人の生徒が、学校において、主要科目にすばらしい成績をのこすと、彼はまたきわめて優れた人間であるとの評価を受けがちである。私たちは、この評価の方法は、人間の本性を無視し、否定するものであることに気づかねばならない。私たちは、「偏向教育から全人教育」という教育の転換を求めてゆかねばならない。

注2.

### 〔知識の教育から智恵の教育へ〕 第2集より

今日の教育は、テストや入学試験のための教育になっている。学校へ入学してから、卒業するまでの教育が、激しい知識の詰め込みになったため、教育の本来の目的が失われてしまっている。このようなあやまったことのくり返しが、一つの社会的状況になってしまっている。このあやまったことは事実として、いろいろな形で現われている、小学生の自殺、登校拒否、怠学、その他青少年問題が増加しつつある。この原因のなかには、本当の教育の意味を満たす教育が行われていない、ということを見出す。私たちは、このようなあやまちをくり返してきた。このことをとても残念に思い、ここで再び教育の本質を考えてみる必要がある。

「教育」という言葉は、人間の内面にあるものを“ひき出す”ということを示している。もし、教育が“引き出す”ものであれば、何かが教育によって引き出されねばならない。もし、教育という言葉が、“教化”を指すとすれば、何かが教化されねばならないだろう。しかし、今日の教育は、外からの知識の詰め込みになっている。

私たちは、「知識の教育から智恵の教育へ」と、教育を変革しなければならない。

日本語の「智恵」は二つの部分に分かれる。「智」は、ものごとをよく知り、わきまえることを意味し、「恵」は、ものごとを明らかにし、よく理解することを指している。人間の本质は、ものごととこれら二つの側面があることを見通す精神的働きにちがいない。私たちは、これを「智恵」あるいは「明敏さ sagacity」と呼ぶ。あるいは、これを「真実の根底から導かれる理性」「価値創造のための能力」と呼ぶ。教育の目的は、すべての人びとに、この能力を開発し、そして、この理性をめざめさせることにある。F.フローベールは、これを「神性 divinity」と呼び、仏陀は、これを「仏界 Buddah nature」と呼んだ。トゥインビーは、それを「愛・知恵・そして創造力」と指したのである。

私たちは、教育を「人間が本来もっている本質的な価値」を引き出す働きをもつよう改革すべきである。

注3.

### 〔時限教育から生涯教育へ〕 第2集より

教育の目的を正すことは、人間の本性をめざめさせることに直接関わる。教育の原点に立ち返ることは、人間の原点に立ち返ることである。そうして人間の本性は引き出される。他の言葉で言うならば、そのことは、本性のもつ価値、知恵、絶対愛、価値創造能力を引き出すことを意味する。これらが引き出されるとすれば(教育の力により)、現在、人類が直面している危機を克服し、真実の人間社会を創ることができる。

教育は、長い間にわたり考え、求められてきた問題である。政治・経済の問題を解決するのと異なり、教育の問題はすぐに解決したり、結果がでるものではない。10年いや100年もの先を見越さねばならないのである。そして、この事実も、私たちが教育を第一の問題として考える理由であり、常に扱わねばならない理由なのである。さらに、教育は、私たちすべてが、それぞれが、考えてゆかねばならないことである。

ここで「時限教育」という言葉の意味を考えてみたい。この概念は、現在までの教育の概念

であった。私自身もこの考えをもち、教育について考えたいつの時でも、私の頭に学校教育が浮かんできたのであり、子どもたちへの教育が思われた。

人間の誕生から死までの人生をみてみよう。時限教育とは、人生のなかの、6才ではじまり、そして大学教育で終わる学校教育の期間を指す。この期間の教育が、私たちが、まずイメージ化する教育なのである。教育の期間としては、学校教育終了までの、人生のうちの期間をとらえてきたのが一般的であった。この教育の期間に得た知識・技術は、人生のうち成人期に労働するなかで使われるのである。そこでは、教育は(生活のための)手段としての意味をもつ、もし教育が、人生の成人期において有利な生活をする目的でなされたなら、学習する意味は、知識のつめ込みに必然的になる。有名校に入ることは、必然的に「試験地獄」を生み出すのである。

私たちが、今までもっていた「時限教育」の考え方は、情報の氾濫化、価値の多様化の時代にはなじまない。学校教育終了後の成人への教育の重要性が叫ばれる。そこで、社会教育、成人教育がクローズアップされるのである。そして、生涯教育の概念が形成されたのである。

しかしながら、学校教育期間を単に拡張することが、継続教育の考え方ではない。教育の本当の目的を考えたとき、人格の完成は、単に学校教育によりなされるものではないことが認識される。

ここが、私たちが(生涯教育の)問題にとりくむ視点である。人間としての原点に立ちもどり、人間の本性を問うのは、私たち自身なのである。

私は、この問題(生涯教育)は、生を与えられた人びと、現在苦しんでいる人びと、そして私たちのすべて、だれもが取り組むべきことであると信じる。

どんな高名な、有能な学者によって、この(生涯教育の)考えが教えられたとしても、人びとが、人生の最も貴いものとしての愛・平和のもつ基本的価値を無視したならば、そこには全く何の意味ももたなくなるであろう。

注4.  
〔継続教育〕 第3集より

教育への伝統主義的考え方は、学校教育へある種の制限を与えた。生涯教育の概念により展望された教育は、(期間的に)限定された学校教育と対比され、永続的な教育を意味する。ある時、<sup>注5.</sup>ケルピー博士は、学校教育は、人生においてある限定された期間になされたものの一つである。と述べられた。今日のような変化の激しい社会においては、教育の改革は、教育概念の思い切った変革という形をとって行われるべきであると思う。<sup>注6.</sup>ラングラン博士が、生涯教育の理念を唱えた1965年以後、この考え方は、時代の強い要請により支持され、発展してきている。現在では、学校教育の期間は、人びとの生涯の中での、単なる一時期にすぎないととらえられている。日本では、それは、6才から大学卒業までを指している。その学校教育期間後、そこで得た知識・技術をもって社会で対応している。しかしながら、現在、社会は激しく変化しており、情報伝達技術の発達はめざましい。科学技術の注目すべき進歩により、私たちの得た知識・技術は、新しい知識・技術の導入なしでは陳腐なものになってしまうのである。このことは、社会においては、学校で得た知識・技術だけではすでに対応できないことを意味している。

このことが「継続教育」が社会教育という形をとって、学校教育終了以後必須なものになってくる理由である。

ゲルピー博士が強調しているように、生涯教育は、学校教育後の一つの教育体系では決してないということを明記すべきである。「継続教育」の考え方は、学校教育の補完としての成人教育を含む、教育期間の延長を意味しない。生涯教育は、人の誕生から死に至る全生涯にわたる学習の継続的な過程である。これは、生涯教育理念の主要な、かつ重要な部分である。単なる学校教育の拡張である、という継続教育への説明は、教育そのものにとって好ましくない。

生涯教育は、伝統的教育の継続のみならず、人間の本性がもっている価値が引き出される、生涯を通じての教育の質の高まりを展望するものでなければならない。

生涯教育の理念の一つの部分「継続教育」の概念は、まず第一に(生涯教育へのアプローチとして)理解されぬばならない。

注7.

### 〔統合教育〕 第3集より

生涯教育の理念は、人びとのライフステージにより分けられている家庭教育・学校教育・社会教育の統合を示した。この観点からみれば、学校教育は家庭教育を補足するものでもなく、社会教育は学校教育を補足するものでないといえる。むしろ、それらの一つひとつは、統合された全体像に立脚していなければならない。なぜなら、それら三つの教育機能は、有機的な結合関係をもっているからである。現象的に言えば、学校も、家庭も社会の中に存在している。個人を例とすれば、彼は、家庭、地域社会のメンバーとして存在し、学校では生徒あるいは、保護者として関係をもっている。家庭、学校、社会の三つの部分は、人間の一生の統合的部分であると同時にそれぞれは有機的関連をもっているといえる。それ故、生涯教育理念の、第二の重要な考え方は、「教育の有機的統合」にあるといえる。

もし、生涯教育(Lifelong Integrated Education)から、単純にlongだけを見てもみると、それは教育の継続的持続を意味するであろう。そこに、「統合 Integrated」の考え方を加えることにより、教育の有機的統合概念は、教育の重要な一つの部分となるであろう。

家庭、学校、社会が真に機能しなければ、そして現在直面している問題解決への教育的責任を分担しなければ、そこには(過去からくり返されてきた)教育問題の解決はありえないだろう。

教育の真の効果は、私たちが教育をそれら三つの教育機能の統合としてとらえた時に期待され、教育の改善は、この教育の全体的構造体系のなかで、三つの教育機能を結合する努力によってのみ達成されるのである。

### — あ と が き —

野村生涯教育センター野村理事長の講演集であったが、その中で、このセンターの基本的理念が主張されている部分をご紹介します。第2集[偏向教育から全人教育へ][知識の教育から知恵の教育へ][時限教育から生涯教育へ]の三つの主張は、このセンター基本理念の柱ともいえるものである。

さらに、第3集[継続教育][統合教育]の考え方は、生涯教育理念のなかでの大きな柱となっている。そして、そのことは、まさしく、人間をとりまくあらゆる分野にある教育機能を統合して考えるという生涯教育の根本的原理でもある。

訳にあたりながら、私の脳裏に強く浮かんだことは、P.ラングランの主張した「教育の任務は、人間存在を、その全生涯を通じて教育訓練を継続することを助ける構造と方法を整えやすくすること」であった。そして、教育は決して、主体の自主性を無視した外からの押しつけ、管理ではない、ということも改めて強く感じるのである。生涯教育理念は、すでに実践へと移されている。そして、常にその実践の根底にあるものは、「人間としての人間らしい生き方」を全生涯にわたって行ってゆく、という、人間の本質にかかわる部分へのアプローチなのである。

原文には、哲学的とも思える非常に難解な部分が多くあり、私のつたない訳で、原文の意図したものとは離れてしまった部分があったかと思われるが、お許しいただきたい。

(注)

注1. 原文では、From the One-sided Education to the Education

for the Whole person

注2. 原文では、From the Education of Knowledge to the Education of Wisdom

注3. 原文では、From the Education of a Limited Duration

to the Education for Eternity

注4. 原文では、Continuation of Education

注5. Dr. Gelpi ユネスコ パリ本部の生涯教育推進の責任者であり、野村生涯教育センター全国大会において講演活動をしている。

注6. Dr. P. Langrant 生涯教育理念の提唱者として知られている。1965年、ユネスコ成人教育推進国際会議において、生涯教育の考え方が体系的にラングランにより提唱された。

注7. 原文では、Integrated Education